

転移性肺腫瘍について

Q & A 1: 転移性肺腫瘍について

肺にできる癌には、①原発性肺癌（肺そのものから発生する癌）と、②転移性肺腫瘍（大腸がん、胃がんなど他の臓器にできた癌が血液にのって肺に移動してきてできる癌）の2種類があります。今回は転移性肺腫瘍についてお話ししたいと思います。

Q & A 2: どんな人が発生するか。

胃がん、大腸がんなど他の臓器に癌があり、以前手術をしたが、目に見えない癌が肺に飛んできて、時間がたって少しずつ大きくなって見つかるという場合が多いです。また胃がん、大腸がんと同時に肺にも転移性肺腫瘍が見つかることもあります。

Q & A: 診断について

病気が3cm以上の場合、胸部レントゲン検査で見つかることもありますが、一般的には胸部CT検査で見つかることがほとんどです。胸部CTであれば5mmから1cmの大きさであればみつかることが多いです。しかし、胸部CT検査は、たとえて言うならば病気の影を見ているため、一回の胸部CT検査では「異常な影がある」ことは分かりますが、癌かどうかは断定できません。そのため1ヶ月程度時間をおいて再度、胸部CT撮影を行い、明らかに大きくなるようであれば「癌の可能性がある」とされることがほとんどです。これは、原発性肺癌の場合も同じです。はっきり「転移性肺腫瘍である」というためには、その影の部分から一部をとってきて、顕微鏡で判定する必要があります。そのために手段として、①気管支鏡（気管支にカメラをいれて検査すること）、②CTガイド下生検（体外からCTを見ながら針をさしていく方法）、③手術の3つがあります。CTや最近でてきたPET検査は、あくまで癌の可能性があることは言えますが、上の3つの方法でしか、正確な診断をつけることができません。しかしどれも体に負担のかかる検査のため、明らかに癌の疑いがなければ、簡単にはお勧めできない検査です。

Q & A 3: 治療について

大部分の場合は、それぞれの病気に対する抗がん剤が治療の根本となります。中には、「肺にできた癌だから、すべて肺の専門である病院で治療して下さい」と受診する患者さんもありますが、正確には違います。肺癌の抗がん剤、胃がんの抗がん剤、大腸がんの抗がん剤はすべて種類や副作用も異なるため、それぞれの専門の先生が行うことが最善と考えます。しかし、もともとの癌（原発巣）が手術で切除されており、転移性肺腫瘍が1,2個と比較的小さく、病気のスピードが比較的遅い場合は、手術で切除することも可能です。手術を行えば、場合によっては、これまで転移性肺腫瘍に投与されていた抗がん剤が必要なくなる、または場合によっては治る可能性もゼロではありません。我々の病院では、ほかの病院と共同して、

転移性肺腫瘍の治療を行っています。しかしながら全員が転移性肺腫瘍に対して切除できるわけではなく、それぞれの患者さんの状態に応じて治療しているのが現状です。もし転移性肺腫瘍で治療を受けている方で、手術を考えている方がいらっしゃれば、沖縄病院のセカンドオピニオン外来を受診することをお勧めします。主治医の先生からお手紙を頂ければ、われわれも場合によっては治療のお手伝いができるかもしれません。